

論説

近代雲南錫業の展開とインドシナ

武内房司

はじめに

箇舊伝統錫業の成立

フランス帝国主義の雲南進出と箇舊錫鉱山

(一) エミール・ロシェと「隆興公司」

(二) 箇舊錫鉱山と利権回収運動

土法と西法——錫の生産構造

(一) 土法生産と商会自治

(二) 龍雲政権下の箇舊錫業再編と錫業近代化

おわりに

はじめに

近年、東南アジア各地で華人社会が形成されはじめた一八世紀の持つ意義が改めて注目されつつある。⁽¹⁾この時期、東南アジア各地において、錫・胡椒などの輸外型産業が展開し、華人社会と中国とは相互に有機的に結びつきを強めはじめた。ある特定の産業の勃興・開発の進展が、人口の集中・都市の形成をもたらすとともに、地域間交易を活性化させ、より広域的な地域経済圏の成立を促すパターンをそこに見いだすことができる。

目を中国に転ずるならば、一八世紀半ば以降、雲南箇舊に勃興した錫鉱業の歴史もまた、その意味で興味深い事例を提供しているといえる。民間鉱山業として出発した箇舊錫業は、一九世紀後半には、紅河を利用しヴェトナムを経由し、香港に接続する交易ルートを成立させた。この雲南―ヴェトナム北部―香港を結ぶ交易圏の存在は、折しも紅河を主要交通河川として西南中国への接近をはかろうとしたフランスの注目するところとなった。フランスが阮朝ヴェトナムを保護国化して以降、本格的に西南中国市場への参入を目指したリヨン商工会議所などのフランス産業界、そうした動きを後押しした同外務省、インドシナ総督府などは、その後もながく箇舊錫鉱山を含めた雲南の諸鉱山に強い関心を抱きつづけたのである。

雲南の鉱業史についていえば、かつては資本主義萌芽研究の一環として、近年では雲南移民研究の枠組で論じられてきた。⁽²⁾しかし、銀・銅の開発と異なり国家の管理・規制を受ける度合が少なく、かつ近代以降、世界的な錫需要の増大に巧みに適応しつつ発展を遂げ、最盛時には世界第四位の生産額を誇った箇舊の錫業史については、従来ほとんど注目されてこなかった。

なお、フランス帝国主義の雲南進出については、雲南鉄道敷設問題との関連から、フランス外務省文書等の一次史料を駆使し、その歴史的背景を浮かび上がらせたブリュギエールの古典的研究以来、一定の蓄積がある。⁽³⁾しかし、これらの研究が依拠するのは基本的にフランス外務省文書をはじめとするフランス側の史料であり、中国側の史料はほとんど利用されず、また、近代雲南鉱業の中で重要な位置を占めた箇舊錫業についても断片的に言及されるに止まっている。採掘権獲得をめざす諸勢力に対し箇舊錫業の側が見せた抵抗の様態とその背景についてはなお検討の余地を多く残しているといえよう。

本稿においては、上記の経緯から大量に残されたこととなったフランス側史料のうち、筆者がナント仏外交文書センター(Centre des Archives diplomatiques de Nante)、リヨン商工会議所文書室(Service Assemblée-Archives, Chambre de Commerce et d'Industrie de Lyon)において見いだした箇舊錫業関連史料などを用いつつ、まず、一八世紀半ばに成立した箇舊錫業への関心から出発し、ついには仏・英・中合弁の鉞山開発企業「隆興公司」の設立にいたるフランス帝国主義の雲南戦略を跡づける。その上で、そうした動きに抗しつつ一九一〇年代に黄金期を迎える箇舊民間錫業の歴史とその特質について若干の検討を加えていくことにしたい。それはまた、こうした作業をつうじ、中国史・東南アジア史という二つの研究枠組に分断され、ともすればこれまで軽視されがちであった雲南・インドシナ関係を中心とする地域史およびその歴史的位置に新たな光を当てたいという筆者の問題関心にもよっている。

なお、以下に論じられるように、箇舊においては経営体を異にしつつも錫鉞石の採掘から錫板への精練、その搬出に至るまでを一貫して生産する体制が伝統的に形成されていた。そこで、本稿においては、いささか熟さぬ表現ではあるが、採掘・精練部門を包括することばとして「錫業」を用いることとする。

箇舊伝統錫業の成立

錫は中国において、古くから祭祀用の種々の器や日用の食器として利用され、加工に適した雲南産の錫はすでに明代から有名であった。しかし、明代においては、宋応星が「今大理・楚雄はすなわち錫を産すること甚だ盛なり」(『天工開物』巻下、五金第一四)と記すように、錫の産地として大理・楚雄があげられるのみで、本稿でとりあげる箇舊錫は登場しない。そもそも鉞山として箇舊が知られるようになるのは、康熙四六(一七〇七)年、雲貴総督貝和諾が銀の採掘を開始して以降であろう。⁽⁴⁾その後、錫鉞はしだいに銀の産出を凌駕し、箇舊は雲南最大の錫鉞山に成長していくのである。

清朝の鉞山開発政策を振り返るならば、乾隆八(一七四三)年が一つの画期となる。清朝は、湖南・広東・雲南等を管轄する総督らの開発要請を審議するなかで、鉛・錫については、従来の農本主義的な立場に立つ種々の採掘制限論を斥け、民間資本による鉞山の採掘を基本的に認める方向性を打ち出した。⁽⁵⁾これは、銅貨鑄造を目的として、国家が独占的に資本を投下し生産物の大部分を国家が買付けるという、いわゆる「放本收銅」制がとられた銅の場合と異なり、民間資本が錫の採掘及び精練に比較的自由に参画しうる条件を提供するものであった。

乾隆五九(一七九四)年に書かれた箇舊雲廟の「永遠碑記」に、「廠地の硐旺さかんにして爐興り、商賈は雲集せり。……力を協せ、金を捐けんきんし、乾隆乙酉(一七六五年)の歳を選択し、室を茲に築けり」とあるように、一八世紀半ば頃には、採掘・精練に従事する鉞山業者が雲集し、後に箇舊の錫鉞管理機構として重要な役割を果たす雲廟が成立したことを伝えている。

箇舊錫鉞業の基礎を築いた功労者として、箇舊老廠にある閔家老洞の錫鉞を発見した通海の人趙天覚の名がよくあげられる。伝承によれば、趙は「もし金鉞が出たらそれを諸君とこれを共にし、得られなければ萬貫の家財を犠牲にし、家産を失っても恨まない」と宣言して採掘を試みるも容易に鉞脈を発見できず、全財産を使い果たし箇舊を離れ出家するに至る。その後、趙の配下の礦徒たちによって発見されたが、趙天覚は廠主として箇舊に帰還することを拒み、恩義を感じた礦徒たちは趙老人廟を建て趙天覚を祀ったとい⁽⁷⁾う。

冒險企業家の鉞脈発見譚の一つであるが、ある意味ではこの物語は鉞夫たちの思い描く理想の出資者⁽⁸⁾「鍋頭」像を伝えている。鉞脈発見の成否が事業の運命を左右する鉞山業において、出資者はひととき寛大さが求められる。一八八九年、雲南蒙自駐在のあるフランス領事の報告によれば、箇舊の錫業においては、地元の紳士や商人からなる出資者は年率一八〜二四パーセントという鉞夫たちにとって有利な利率で資金を提供し、かつ採掘した鉞石に対する所有権は鉞夫が持つと見なされたとい⁽⁸⁾う。

趙天覚の錫鉞発見は道光年間（一八二〇〜五〇）のあたりとされるが、光緒二三（一八八四）年には、臨安府蒙自県に所属する一つの「郷」にすぎなかった箇舊に同知及び衙門が設置された。これは、一九世紀以降のこうした民間資本による錫鉞山の継起的発見と採掘がもたらした結果であり、「錫城^{すずのまち}」としての成熟を示すとともに、後に触れるように、フランスの箇舊錫業への対応に触発されつつ、清朝当局が改めて箇舊の錫に関心を示したことを示すものである。

こうした箇舊伝統錫業の展開を牽引したのは外部からの需要の増大であった。宗族觀念が浸透するなか、葬礼などの各種祭礼に際し、死後の幸福を願って錫箔を用いて模造された「元宝銀」を買い求め、それを燃やして冥界の祖先に供える習俗が定着していったことも、錫に対する需要を高めた。銀経済の普及が新たな錫需要をもたらした、

ともいえるだろう。一九世紀以前、世界でも最も多量に錫を用いたのは中国だ、とする説の生まれるゆえんである。⁽⁹⁾ 一九世紀後半になると、箇舊の錫は、鑄造用の銅の運搬ルートにしたがい雲南より四川を経由し全国市場に接合する流れよりはむしろ、広東を経由し錫箔の主要生産地杭州などにもたらされるルートが主流となった。

錫を輸送するルートとして古くから利用されたのは、錫板を馬の背に積み、陸路をつうじて広西の百色まで運びそこから船で西江を下り、広東に至るというものである。しかし、このルートは一八六〇年代末にはすでに、著しい衰退を見せていた。『大南星録正編第四紀』、卷三六、嗣德二〇（一八六七）年春正月、の条には、次のような記事が見える。

白錫は清国雲南蒙自州に産出す。前に広西に道を取り、広東に運就す。近くは匪、路梗するに因りて、道を假るに洮江より河内を過ぐ。外関船を雇い、載して東に回る。⁽¹⁰⁾

“匪”の台頭、すなわち太平天国およびその後の天地会系諸叛乱の勃興にともない、新たに箇舊より陸路で蒙自に至り、洮江すなわち紅河を下ってハノイ・広東にいたるルートが成立したというのである。一八七〇年代以降、雲南・ヴェトナム国境に位置するラオカイ（保勝）に劉永福率いる黒旗軍が武装拠点構えたのも、錫などを積載する商船から徴収する通行税収入を見越してのことであった。⁽¹¹⁾

定期的にやや遅れるが、督辦雲南鈔務大臣唐炯は一八八九年の上奏のなかで、西江ルートと紅河ルートとを用いた場合のそれぞれの輸送コストの比較を行なっている。箇舊の錫を広西省百色より西江を下り香港を経由して上海に運んだ場合、釐金税および脚費として二五〇〇斤あたり二七〇両五錢を要するのに対し、蛮耗から紅河を下り、ハイフォン・香港を経て、さらに上海に搬出した場合、一五五両三錢余であったという。⁽¹²⁾ 一〇〇両以上の開きが出たのは、広西ルートの場合陸路が多く、その分、釐金の負担が増えたことによるものであろう。輸送コストの上昇

は紅河ルートへの移行を加速することになった。

箇舊錫の輸出ルートとして紅河ルートが重要性を帯びはじめた一八七〇年代はまた、缶詰の材料などに用いられる錫の消費が世界的規模で飛躍的に伸長した時代であった。紅河ルートを移送される錫はこの時期、紅河を介して西南中国の市場に接近しようとはかるフランス勢力の注目を浴びることとなった。

フランス帝国主義の雲南進出と箇舊錫鉱山

(一) エミール・ロシエと「隆興公司」

箇舊の錫に最初に着目したヨーロッパ人は、フランス人エミール・ロシエ Emile Rocher (一八四六—一九二四) であろう。⁽¹²⁾ ジャーディン・マゼソン商会に勤務する父に従い、一八六三年より上海で暮らしはじめたロシエは、まもなく父母を失い孤児となったが、上海総領事ブルニエ・ド・モンモラン Benier de Montmorand 夫妻らの庇護を受け、そのまま中国での生活を継続し中国語の能力を身につけた。後に、シケル Giquel の主宰する福州の船政局で冶金術を学んだことは、ロシエを雲南に結びつける契機となった。すなわち、雲南当局より大砲・白砲の鑄造を依頼され、一八七一年より二年ほど雲南に滞在することとなったのである。なお大理を中心に勢力を保っていた回族反乱を征圧できずにいた雲南の清朝軍は、漢語にも熟達し、かつ西洋式武器製造技術を身につけたロシエのような人材を必要としていたのである。武器製造が軌道に乗ると、ロシエは雲南の鉱業を精力的に視察した。

一八七二年九月、雲南を離れる直前、ロシエは、武器を携え紅河を遡ってくるフランス人商人ジャン・デュピュイ Jean Dupuis を迎えるべく蜜耗に赴くよう当局から依頼された。ロシエは雲南入りする前に、漢口にてデュピ

ユイに会っており、旧知の間柄であった。しかし、紅河遡江のヴェトナム側の許可がおりず、デュピュイが雲南蛮耗に到着したのは、翌年の二月のことであった。

一八七二年から七三年にかけてのデュピュイの交易活動で注目されるのは、紅河を利用し雲南箇舊の錫を香港に運び売却する事業を展開したことである。一八七三年三月、デュピュイは箇舊を訪れ、錫鉱山および溶鉱炉を見学している。デュピュイのこの箇舊訪問は、武器を提供する見返りに、一万ピクル（六百トン）の錫を雲南提督馬如龍の代理人から譲り受けるためであった。⁽¹³⁾それを香港で一ピクルあたり一五〇フランで売却したのである。⁽¹⁴⁾

ロシェもまた、この間、蒙自県及び箇舊を訪問し錫礦および錫精練の調査を行なったが、蒙自で病氣となり一八七三年には上海に戻らざるをえなかった。翌年、健康を回復すると、ロバート・ハートの知遇を受け、海関職員として勤務することとなった。その後、在北京フランス公使館に乞われ、中国・インドシナ国境画定交渉や雲南における領事館開設などに参加し、一八八八年には設立されたばかりの駐蒙自フランス領事に就任した。⁽¹⁵⁾

ロシェは、一八七九―一八八〇年、自らの雲南体験をもとに『雲南省』(*La Province chinoise du Yun-nan*)を著わした。⁽¹⁶⁾雲南の地理・経済事情、とりわけ雲南における鉱物資源の豊かさを強調したこの著作は、後にヴェトナム北部・雲南地域に関心を持つ多くのフランスの政治家・実業人などにしばしば引用され、「雲南神話」を生み出すのに貢献した。雲南は豊かな経済的価値を有する地域としてにわかに脚光を浴びるようになったのである。

リヨン商業界の実力者ユリス・ピラ *Ulysse Pila* もエミール・ロシェを評価した一人であった。⁽¹⁷⁾ピラの主唱によって、一八九五年、リヨン商工会議所から大型調査団を西南中国に派遣されることとなった。ピラは、製糸業者の息子としてリヨン商業界と深い繋がりを持ち、かつて領事として雲南に長く駐在し、西南中国の事情に精通したエミール・ロシェに調査計画の立案を依頼した。商工会議所側は当初、上海より長江を遡江し四川に至るルートとハ

イフォンより紅河を遡江し昆明に至るルートとを比較する計画であつたが、エミール・ロシエは雲南・四川・貴州・広西を主要調査地とするよう強く主張した。四〇日ほどをかけ、ハノイからラオカイまで紅河を遡江し、その後は主として陸路で昆明・重慶・貴州遵義各地区を回り、産業・交通・市場等の調査にあたるというものであつた。⁽¹⁸⁾

ロシエの提案は受けいれられ、調査団の団長には三〇年余の中国生活の経験を有するエミール・ロシエ、秘書には、かつて孤児となつたロシエを援助した中国総領事ブルニエ・ド・モンモランの孫アンリ・ブルニエ Henri Benier が就任した。このほかに、絹織物業・綿業・鉱山業・商業に詳しい専門スタッフが加わり、合計一二名から構成された。一八九五年十一月、一行はハノイを出発し、紅河を遡り、蒙自を経て、同年十二月、雲南府（昆明）に到着した。

調査終了後、リヨン商工会議所から西南中国の経済事情を精査した『リヨン商工会議所調査団報告』が公刊されたが、箇舊の錫に対する開発戦略といったものが同書に明確に提示されることはなかつた。⁽¹⁹⁾しかし、このことは調査団が箇舊の錫に関心を持たなかつたことを意味しない。未公刊のリヨン商工会議所蔵文書には、エミール・ロシエ自身の報告書や帰国後の団員による報告会記録などが含まれており、同調査団が箇舊の錫に対し、高い関心を払っていたことが確認できるのである。

エミール・ロシエは、一八九六年九月にリヨン商工会議所に送った報告書箇のなかで、鉱山開発に対する雲南省の官僚たちの考え方が蒙自領事時代に比べて大きく変化していることを指摘するとともに、かつて面会した箇舊の鉱山主たちもまた、ヨーロッパ式精練法の導入を望んでいることを訴えた。

一八九三年に会う機会を得た大きな廠主ないし爐主はヨーロッパ方式（の精練法）を導入したい旨を表明した。皆な自ら進んで引き受ける用意はある。しかし、当局の賛意を得ていない状態で始めるわけにもいかず、

今日設備を変える必要を認めはじめた政府が、そうした方向に進むことを忍耐強く待っているのだ。⁽²⁰⁾

リヨン調査団として蒙自を訪問した際には、一八七三年の時のように自由に鉱山地区に足を踏み入れることができたわけではなかった。鉱山資源の専門調査員として調査団に参加したデュクロ Ducloux が箇舊鉱山に派遣されたが、実見できた鉱区は極めて限られていた。にもかかわらず、ロシエは現在の箇舊錫鉱の開発可能性、現地爐主たちのフランス産業界に対する好意的な姿勢をアピールしようとしたのである。この報告を受けとったピラもまた、傍線部で示した個所に下線を加え、重要な情報として位置づけた。

デュクロもまた、帰国後の一八九七年一〇月に開かれたリヨン商工会議所での会合において、次のような発言を行なっている。

蒙自にいずれ設けられるであろう支店にとって錫は最も高い利益を代表し、〔重要な〕交易品となるであろう。この交易を独占するためには箇舊にまで入り込む必要があるし、またそれは不可能ではない。蒙自ないしトンキンに精練工場を設立することを研究すべきであろう。⁽²¹⁾

非鉄金属類を海外に依存する割合の高かったフランスは、一八九七年に八三六七トンもの錫を必要とした。⁽²²⁾したがって、同年、二五〇〇トンを輸出するだけの産出額を誇り、インドシナに隣接した雲南箇舊の錫は大きな魅力であつたろう。

ほぼ同じ頃、雲南の鉱山に目を向けはじめていたのはフランス鉄鋼委員会 Comité des Forges de France であつた。同委員会は、一八九五年に中国産業研究会社 Société d'Études Industrielles en Chine を発足させ、中国の鉱業に関心をよせはじめるとともに、翌年には、エンジンニアのデュジャルダン・ボメス Dujardin-Beaumez を中国に派遣している。デュジャルダン・ボメスはとりわけ雲南の鉱山に強い興味を示し、報告書のなかで次のよ

うに述べた。⁽²³⁾

雲南、特にトンキン辺疆、すなわち臨安府と蒙自との間においては錫が豊富に産し、商業的に注目するに値する。しかし雲南はとりわけ銅と銀の視点から見ると興味ぶかい。総督唐（督辦雲南鉱務唐炯）と帝国の財政大臣は帝国の弁務官の庇護と監督のもと、ヨーロッパ人が開発請負人となり開発に関与することを奨励している。

しかし、外国資本を導入し、鉱山の開発を推進しようとする清朝の政策は雲南各方面の強い反対を招いた。とくに義和団運動前後の雲南において、激しい排外運動を展開したのが箇舊の鉱山労働者たちであった。雲南における反仏運動を刺激したのは、雲南のインドシナへの併合をも射程に入れたインドシナ総督ポール・ドゥメール Paul Doumer の露骨な権益拡大政策であった。

一八九八年一月、インドシナ総督ポール・ドゥメールは、インドシナ連邦の公共事業部門の責任者ギユモト Guillemot, C. を雲南に派遣し、雲南のインドシナ鉄道建設の可能性を検証させた。ギユモト調査団にはフランス鉄鋼委員会の鉱山技師ルクレール Leclère, André が随行し、鉱山・地質調査にあたった。⁽²⁴⁾

ルクレールの鉱山調査の成果が伝えられると、フランスの財界人は雲南鉱山に積極的な関心を示すこととなった。鉄鋼委員会の幹部であったコント・ド・ボンディ Comte de Bondy は、一八九九年三月、外務大臣デルカッセ Delcassé に対し、箇舊の半径二〇〇キロメートル内の錫鉱山・炭鉱に対する採掘権を取得するよう要請した。⁽²⁵⁾ デルカッセはフランス資本家の中国への投資を歓迎し、北京公使館・蒙自領事館の協力を約束した。フランス外務省はドゥメールの性急な拡張主義には批判的であったが、財界の雲南進出に対しては好意的であった。ド・ボンディは同年五月、パリに雲南鉱業シンジケート (Syndicat minier du Yunnan) を設立し、自らその会長に就任した。

副会長のスレリエ Cellérier が蒙目に出向き、中国側の買弁と直接箇舊附近の鉾山採掘権にかんする協定を締結する手筈であった。

しかし、蒙目のフランス領事ドジャン・ドラ・バティ Dejean de la Bâtie は雲南シンジケートが箇舊の採掘権を獲得しうる可能性について否定的な見解を北京の公使館に送った。箇舊の鉾山においては私有財産権が確立しておらず、政府も単に税徴収権を持つのみで鉾山を規制しえない状況のもので、ヨーロッパ型の採掘権を取得することなど無理だというのである。この報告を受け、北京公使ピション Pichon, Stephen はデルカッセにスレリエの箇舊訪問を延期するよう要請した。

さらに、同じ頃、蒙目地区においてはフランスの雲南進出に対する不満が渦巻いていた。一八九九年六月、箇舊の錫鉱労働者が蒙目のフランス領事館を襲撃したのである。⁽²⁶⁾この蒙目襲撃事件に際しポール・ドゥメールはインドシナからの軍の直接派兵を検討したほどであったが、外相デルカッセらに代表される外務省の強い反対を受けることになる。インドシナ総督府の側では、雲南をインドシナの附屬地とみなし、軍の派遣、総督府官僚の常駐権を打ちとろうとしたのに対し、外務省側は一八九六年の英仏協定に見られる英仏協調路線と清朝の領土保全を前提とする外交政策に固執したのである。⁽²⁷⁾

箇舊における採掘権取得の困難さを認識した雲南シンジケートは、改めて雲南西北に豊富な埋蔵量を有する銅鉾に目をつけた。しかし英領ビルマと接する雲南西北は、イギリスとの協力が不可欠であった。また、雲南に対し両国が同等の権益を有することを明記した一八九六年の英仏協定の趣旨から見ても、雲南における鉾山開発を英仏共同で進める方が得策だとする判断が生まれた。かくして冒険企業家スレリエはフランス外務省の承認を経ることなしに急遽ロンドンにわたり、英仏シンジケートを設立したのである。

このシンジケートは後にリヨン商工業界を代表するユリス・ピラらを加えて一九〇〇年四月に大幅に改組された。そして、フランス政府の承認も取りつけ、一九〇一年四月、雲南当局と採掘権の交渉を進める担当者として、再び雲南問題の専門家エミール・ロシエを送り込んだのである。ロシエは交渉を進めるにあたって、(1) 省政府によって採掘された鉱山、(2) かつて採掘されたもののすでに放棄された鉱山、(3) 未着手ないし未発見の鉱山、に対する採掘権の取得を目指した。これらの条件は、簡舊鉱山主たちの諸権利と抵触することなく、期待される銅山開発を円滑に進めることを目指したものであった。⁽²⁸⁾

光緒二七(一九〇一)年五月、雲南鉱務督辦唐炯と会見したロシエは、鉱務公司与合併で各鉱山の開発を順次進めていきたい旨の提案を行なった。唐炯はこれに応じ、「現在時局はかつてと大きく異なり、もはや〔外資を〕拒絶することが困難である」以上、「雲南に中西の鉱務公司を設立し、彼の有余の財」を使って鉱山開発を進めるべきだと清朝に上奏した。⁽²⁹⁾ かくして雲南省での同意を取りつけたロシエは次に北京に赴き、外務部との条約交渉に臨んだ。その結果として、光緒二八(一九〇二)年、エミール・ロシエは、外務大臣瑞良とのあいだで中英・仏合併の隆興公司を設立し、雲南七府の鉱山開発を推進する協定を結ぶのに成功したのであった(「雲南隆興公司承辦七属礦務章程」⁽³⁰⁾)。

(二) 簡舊錫鉱山と利権回収運動

一八九九年の蒙自襲撃事件は、雲南シンジケートに対するフランス人投資家の投資意欲を大いに減退させ、スレリエらが英国資本家の協力を仰ぎ拡大「雲南シンジケート」を組織する契機の一つともなった。この暴動を指揮した楊目元はまもなく文山州知州によって捉えられ処刑されたが、その後も簡舊「廠匪」の反乱は続発した。一九〇

二年にも、楊自元の復讐をかける周雲祥の蜂起が起った。周雲祥は「外人の侵占を常に慮る」⁽³¹⁾砂^{さいくわん}丁^{てい}を集め、「拒修鐵路・仇洋」⁽³²⁾をにかけて臨安府城を攻撃した。「廠を保ち外を御」⁽³³⁾さんことを説いた周雲祥に追従する紳士や富裕者も多かったという。フランス総領事オーギュスト・フランソワ Francois, Auguste をはじめ、雲南鉄道建設のため蒙目に滞在していた技術者たちは一時避難することを余儀なくされたほどであった。

簡舊鉱山労働者を主体とするこれらの反仏暴動は、一九〇二年以後、沈静化に向かった。しかし、それによって雲南シンジケートが清朝政府より獲得した新規鉱山開発権を簡舊の地において順調に行使しえたわけではなかった。簡舊の鉱山主や雲南各地の紳士らが、英仏資本主導の鉱山採掘・精練に対し、粘り強い抵抗を見せたのである。

一九〇五年、隆興会社が最初に試みたのは、製品としての錫板を購入し、それをヨーロッパ市場に輸出するプロジェクトであった。公司職員の試算では、簡舊の錫価格はヨーロッパにおける市場価格と比べた場合、輸送費その他すべての必要経費を加えてもなお安価であった。しかし、商人は公司との交渉が禁じられ、錫板購入の道は閉ざされたのである。

一九〇六年、隆興公司是簡舊を含む臨安府において新鉱山の可能性を探るべく、蒙自の地主閔立松の所有する大屯古山廠を調査する機会を得た。技師の調査が始まるやいなや、まだ蒙自に引き上げぬうちに、閔立松とその息子は土地を外国人に売却しようとしたかどで逮捕・投獄された。⁽³⁴⁾閔立松は一族から公山を許可なく「外人」に売却したとして訴えられたのである。閔立松事件によって、隆興公司に関する協定の第二項、すなわち「公司是直接民間から鉱山を租借することを得ず。また山地を購入し永に業主となることを得ず」という条項が改めて確認され、公司の鉱山購入計画は挫折した。

隆興会社が次に実現を目指したのは錫鉱石（「礦砂」）を簡舊から直接購入するという方策であった。光緒三十四

(一九〇八)年、箇舊の鉅商たちは、エミール・ロシエの期待とは裏腹に、「もし礦砂を購入するのを許可し、(彼らが)西法によって煎煉(せうれん)したならば、自ずと土法よりは勝れているため、多くの鑛戸(ミヤ)は生計の道を失い、事端(じけん)を引き起こしかねない」と強く反対したのである。⁽³⁶⁾

省都雲南府においても、紳士・商人らを中心に、一九一〇年、隆興公司に対抗すべく「保滇礦務研究總會」が組織された。⁽³⁶⁾ただちに雲貴總督の承認を得たこの「研究会」の規約第一〇条には、雲南の鉅山を購入・売却・租借しようとする者はまず、同会にその意図を通知すべし、と規定されていた。⁽³⁷⁾鉅山主が隆興公司と採掘契約を交わすのを阻止しようとしたのである。隆興公司の採掘権を保証し、北京の承認も得た「礦務章程」は、こうして紳商や省政府官僚のサポータージュにより空文化していった。

隆興公司の企業活動に追い打ちをかけたのは、雲南省出身官僚による協定廃棄要求であった。宣統三(一九一一)年七月、雲南省出身の京官で内閣叙官局副局長の任にあった張鎔ら四三名が連名で清朝政府が締結した「隆興公司章程」の「廢約」を求める請願書を提出した。⁽³⁸⁾張鎔らは章程のなかで中国側から股の募集を行なうことを明記しているにもかかわらず、一九〇二年以来この件は秘匿され清朝の「官紳工商」の股購入(かぶ)の機会が与えられていないこと、第二に、隆興公司是学堂を開設し鉅山技術者の育成につとめ、華人の鉅山開発を促すことを謳いつつ、一ヶ所も開設されるに至っていないなど、華人が權益から排除されていることを指摘し、廢約を訴えたのである。これに答えて清朝は、一五〇万両を六期にわけて隆興公司に返還することを条件に、同公司との間で締結した「合同」の破棄を決定したのであった。⁽³⁹⁾

かくして資本・技術を英仏両国に仰ぎ、雲南の諸鉅山を開発する清朝の一連の計画は頓挫を余儀なくされた。注目されるのは、フランス産業界の資本進出に刺激を受け、清朝官僚の側にも、広く全国の商人より股分(かぶ)を募って最

新機器を導入し雲南諸鉍山の開採を推進しようとする動きが存在したことである。雲貴總督岑毓英・雲南鉍務督辦唐炯らが一八八四年に設立した「雲南鉍務招商局」がその端緒にあたる。⁽⁴⁰⁾しかし、簡舊錫に関しては、官が錫を定額で購入し四川ルートで中原の市場に提供し収益をあげようとする、かつての銅生産に準じた政策の適用に止まるものであった。結局、「雲南鉍務招商局」方式は、雲南東川銅山などの開発が不成功に終わったこともあり、数年で廃止されるにいったった。

しかし、二〇世紀に入り、簡舊錫に対する隆興公司の度重なる進出に刺激され、錫生産設備をともなった官督商辦型近代企業を設立すべきだとする発想が生まれていく。宣統元（一九〇九）年、雲貴總督錫良は官股百萬元、紳商より集めた商股七六万九千五百元を資本として、簡舊錫務公司を設立した。同公司の総理に就任した王夔生は南洋の錫鉍業を視察し、ヨーロッパ式錫精練技術の導入を目指した。⁽⁴¹⁾

簡舊錫務公司は、簡舊の中でも豊富な錫の埋蔵量を誇る馬拉格鉍山を購入するとともに、五〇万元余を投じ、広州に拠点を置くドイツの貿易商社礼和洋行 Carlowitz & Co から、二五〇馬力の出力を誇る最新式の溶鉍炉、一日四〇〇トンの錫鉍石を洗浄可能な洗砂廠、八〇〇メートルに及ぶケーブル設備など、最新式の錫精練機器を導入し、一九一三年には設置も完了した。その他工場の敷地取得費用とあわせると一トンも錫を生産しないうちに公司の資本を使い切ってしまったことになる。

しかし、豊富な資金と最新機器を備えた簡舊錫務公司の登場がすぐさま錫生産の増大に結びついたわけではなかった。まず、第一に、錫鉍の入手が容易でなかった。同公司の董事の一人李文山が錫鉍を産出しない南蛇洞にケーブルの敷設を指示した結果、同公司は土法により採掘した鉍石を新たに購入しなければならなかったのである。第二に、ドイツ式溶鉍炉に適した石炭の入手難という事態に直面した。こうしたハンディを克服し、簡舊錫務公司の

経営が軌道に乗るのは、馬洛格鉞山の採掘が進み、豊富な錫鉞石を安定的に確保できるようになる一九二三年以降のことであった。⁽⁴²⁾ その間、伝統精練法「土法」に依拠した爐戸が相変わらず精練の主役であり、一九一〇年代に全盛期を迎える箇舊錫業全体を支えていたともいえるのである。

土法と西法——錫の生産構造

(一) 土法生産と商会自治

フランスは一八九八年に敷設権を獲得して以来、風土への不適応に苦しむ中国人建設労働者の大量死といった多くの困難に遭遇し、かつ当初の見積もり七〇〇〇万フランに対し一億六五〇万フランを越える予想外の出費を重ねながら、一九一〇年、ようやく滇越鐵路を完成させた。⁽⁴³⁾ 滇越鐵路の開通は確かに箇舊の錫輸出に貢献したようである。一九一七年のフランス在蒙自領事の報告によれば、一九〇四年から〇九年までの錫輸出は平均四〇〇八トンであったのに対し、一九一〇年から一五年までの平均輸出額は七〇六六トンに達した。鉄道建設前に比し、七六パーセントの増加である。⁽⁴⁴⁾

こうした箇舊錫の省外輸出を支えたのが箇舊の民間爐主らが担った錫の土法精練施設であった。乾隆五六（一七九一）年の序を持つ『續修蒙自県志』⁽⁴⁵⁾は、箇舊にある万宝爐ほか九座の爐名をあげるのみであるが、一九二一年、蒙自に駐在していたフランス人軍医ジャールラン Jarland が蒙自領事に送った報告によれば、最盛時、箇舊の爐の数はすでに六〇を数えていたといふ。⁽⁴⁶⁾ 一九一〇年代、爐戸は確実に増加し、増大する錫需要に応えたのである。

錫精練・鉞採掘労働者の数もこの時期、大幅に増加している。正確な箇舊鉞山人口の変遷をたどるのは容易でな

いが、一八七三年に箇舊を訪問したロシエは、ほぼ三千程度と類推している。⁽⁴⁷⁾これに対し、ジャルランは一九一八年前後の箇舊における錫鉞採掘・精練労働者の数を約一五万と見積もっている。貧しきものは少数民族地区と鉞山に行く（窮走彝方、急走廠）⁽⁴⁸⁾という雲南のことわざがある。瘴氣の蔓延する少数民族地区に商人として、または箇舊錫鉞山に鉞夫として赴く漢族移住者たちの姿を表現したものであるが、この時期高まりを見せた箇舊への移民風潮の激しさを活写している。

一五万もの鉞山労働者を抱えるとなれば、箇舊近辺の收穫にのみ依拠して糧食を確保することはもとより困難であった。こうした鉞山労働者の糧食を確保するために開化・羈江・宜良等の地から穀物が供給され、同時に、それを可能とする箇舊と蒙自・開遠地区とを結ぶ陸上輸送網の発達が促された。⁽⁴⁸⁾

雲南において、一般に、鉞山所有者を“硃戸”⁽⁴⁹⁾といい、“硃戸”のなかでも資本を提供し“油米”を鉞山労働者に提供する者を“鍋頭”と呼んだ。この“硃戸”より鉞石の提供を受け、精練に従事したのが“爐戸”である。中小の出資者の多い箇舊錫山においては、“箇舊錫務公司”のように採掘・精練部門を一体的に経営する事例は稀であり、“硃戸”と“爐戸”とは別個の経営者によって担われていた。

“鍋頭”は採掘労働者として砂丁を雇い入れ鉞石の採掘にあたり、爐戸は鍋頭から洗浄を施し不純物を除去した鉞石（“錫砂”）の提供を受け、錫板に精練する。土法溶鉞爐の場合、各爐は一日、五五斤の板を約四〇枚精製することが可能である。⁽⁵⁰⁾

“鍋頭”・“爐戸”は、すでに一八世紀末には箇舊雲廟に結集し、錫の採掘・精練部門を統轄したギルド組織を形成するに至る。乾隆五九（一七九四）年に書かれた雲廟の碑刻には、“鍋頭”・“爐戸”らの公議により、錫鉞一票あたり一錢二分、錫一張（約二五〇〇斤）あたり銀二錢を徴収し孟蘭会の開催費用にあてること、並びに錫鉞石の

出境禁止が宣言⁽⁵¹⁾されている。

ギルドが会員の鑛金によって主宰する廟の香火費用を負担するというのはどこでも見られる現象であるが、この碑刻において、“鉛・錫を論ずるなく、箇〔舊〕に來たりて熔煉せしめ、運砂出境するを許さず”と明言している点が注目される。有力“鍋頭”・“爐戸”を中心とする箇舊錫業ギルドが目指したのは厳格な錫鉱石の管理体制であり、四年後の嘉慶三（一七九八）年一〇月に建てられた箇舊の碑文「箇舊公議廠規碑記」においては、“廠規”、すなわち採掘・精練部門がともに認める合同規約として明文化された。

一、硃砂買売、上前人將礦稅說出、務須報明鍋頭、得有売飛、始能出售。倘上前人私行售売、即以盜硃論罪。

一、硃砂關係爐戸本金、如有偷漏、無論多少、一經查實、定予死罪。

一、硃砂向來駄箇熔煉、不准私運出境、如違定予死罪。⁽⁵²⁾

硃、“上前人”ともに箇舊独自の用語である。前者は鉱砂すなわち錫鉱石を指し、後者は、鉱夫の監督・指揮、賃金の支払いなどを担当する鉱山の管理者をいう。⁽⁵³⁾上前人は採掘した“硃”を売却するにあたっては“鍋頭”の売飛^{きよばいよう}を必要とし、私的に外部に販売した場合には“盜硃”として処罰すること、“硃”の“偷漏”や箇舊以外の地への“私運”に対しては処刑も辞さないことが明記されたのである。

この規定は嘉慶三（一七九八）年に定められたものであるが、箇舊錫業が最盛期を迎えていた一九一〇年代に⁽⁵⁴⁾おいても厳格に守られていた。ジャランは報告のなかで、このギルド規制の厳格さに触れ、次のように述べている。

この地区で確立し、商會が厳格な執行の責任を負う規則によって、錫鉱石は箇舊でのみ管理され、箇舊でのみ扱われねばならない。現行規則に対する違反は、投獄から処刑にいたる処罰が課せられる。雲南省政府も北

京中央政府もこれに干渉することはできない。箇舊以外の地で処理するために売却されたことが明らかになると、商会はただちに地元のすべての有力者を含んだ大規模な集会を開き、箇舊以外の地に売却した者はその場で逮捕、投獄される。錫鉱石及び輸送に用いられた馬も没収される。次回に違反した場合には処刑されることになる。規則に基づき、裁判は商会で行われ、執行はその執行機関が実施する。町以外の地においても、一介の兵士によって違反者の逮捕が行われ、商会に引き渡すことで報奨金が与えられる。(傍線部引用者)

民国期に入り、箇舊の錫鉱石管理がむしろ強化されていることが窺えよう。こうした鉱石に対する管理強化は、外国企業の箇舊進出に刺激された結果でもあった。一九一九年、錫価格が暴落した際に、当時世界の錫生産の半分を支配していたシンガポールの英国企業「海峡貿易会社 Straits Trading Co.」は雲南への進出を試み蒙主に支店を設けるとともに、箇舊の錫商たちが抱えている在庫五〇〇〇トン⁽⁵⁵⁾をただちに購入することと引換えに、今後一〇年間にわたり採掘される錫鉱石の半分の先買権を獲得するという提案を行なったが、たちまち峻拒された。

のちに同会社は、雲南都督唐繼堯を介して鉱山主とのあいだに小額の錫鉱石契約を結んだが、これに対しても、箇舊の商会は強く反対した。もし輸出許可が維持されるなら、箇舊人民は、地域外に輸出するため錫鉱石を売った者は処刑されるとした、かつての規則をふたたび制定して権利を守ると宣言した。⁽⁵⁶⁾同時に、代表を雲南省政府に派遣し錫鉱石の輸出禁止を請願する一方、箇舊における「奸商」摘発につとめ錫鉱石の密輸を厳禁した。こうして蒙自に設立された同会社は撤退を余儀なくされたという。⁽⁵⁶⁾箇舊の錫商たちが売却を認めるのはあくまで精練された錫なのであって錫鉱石ではなかった。箇舊の爐主や廠主たちは清代以来のギルド規制を復活させることで、雲南省の軍閥と結びつた外国企業の進出を阻止しようとしたのである。

商会はまた、慈善・警察・水道などの面で鉱山都市箇舊の行政を支える存在でもあった。このように箇舊の錫商

ギルドが地方行政にまで参画しはじめるのは、雲南の回民反乱によって清朝の統治機構が機能停止に追い込まれた時にまで遡る。ロシュによれば、この時期、箇舊に公局が設置され、箇舊から搬出されるすべての金属に対し、五パーセントの税が課せられたという。⁽⁸⁷⁾ ジャーランによれば、一九二二年当時、箇舊における治安は、四八〇名の正規兵によって維持されたが、その給与はすべて商会の負担であった。一九一八年頃、コレラが大流行し七〇〇〇名を超える死者を出した際に、フランスの協力のもと医療体制の充実がはかられ、数百人入院可能な病院（「法国医院」）が建設された。入院費・病院維持費などは商会の負担であった。

商会とともに箇舊雲廟に設置された箇碧鐵路公司およびその役員組織「股東会」の活動も見逃せない。この「股東会」はもともと、箇舊と蒙目に近接した滇越鐵路の碧色寨とを結ぶ鉄道の建設を促した箇碧鐵路公司の基礎組織である。前述したように、フランスの資本と技術によって、一九一〇年に完成した滇越鐵路はなお錫の生産地箇舊にまでは及んでおらず、馬を用いた陸上輸送に頼らざるをえなかった。そこで、箇舊・蒙目の錫商人らは、一九一三年、箇碧鐵路公司を設立し、滇越鐵路に接続する鉄道を建設し、箇舊錫の迅速かつ大量の搬出を目指した。

鉄道敷設資金としては、清朝が敷設を急いだ雲南・四川鉄道（「滇蜀鐵路」）の建設資金があてられた。清朝は、滇蜀鐵路の敷設にあたって箇舊の錫商から「錫一張あたり五〇両の捐税を徴収し、その資金とした。辛亥革命により滇蜀鐵路敷設計画がそのものが挫折した後、箇舊にすでに蓄積されていたこの捐款をもとに、錫の輸送鉄道を建設する方針が箇舊商人たちから提案され、同会社が組織されたのであった。⁽⁸⁸⁾ 箇舊錫商ギルドを主体とした、実質的な民間鉄道と見ることができよう。碧色寨と乍甸を結ぶ支線を敷設し、わずか六〇センチメートルの狭軌鉄道ながら、六四八メートルに及ぶトンネル工事をともなう難工事を経つつ、二一年には全線を開通させたのである。⁽⁸⁹⁾

しかし、土法精練にもとづく箇舊民間錫業は二〇年代に入り、次第に衰退の道を歩む。爐戸の経営を圧迫した要

因の一つは、生産コストの上昇、とりわけ精練に要する燃料価格の高騰である。土法精練においては、爐で錫鉱石を熔解するのに木炭が用いられた。その結果、もともと森林で被われていた箇舊附近は、エミール・ロシェが最初に調査に訪れた一八七三年の段階ですでに禿山化し、木炭は爐から三〇〜四〇里離れた山地の「夷人」たちの供給を仰がねばならなくなっていた。⁽⁶⁰⁾一九二〇年においても状況は変わらず、箇舊の爐戸は石炭を用いず相変わらず木炭を精練に使用し、八〇キロメートル以上離れた地から調達していたのである。⁽⁶¹⁾

しかし、中小爐戸たちにとりわけ大きな打撃となったのは、一九一九年から二〇年にかけての香港の錫相場の大暴落である。トンあたり一八〇〇元以上を保っていた香港錫価格が一二〇〇元にまで落ち込み、生産費すらまかなえぬまま倒産する商民が相ついだ。⁽⁶²⁾第一次世界大戦後、錫全般に対する需要の落ち込み、とりわけシンガポール産に比べて不純物の含有量の多い箇舊産錫の需要が低落したこと、第二に、生活習俗の変化にともない宗教儀礼用品への需要が落ち込んだことがその要因であった。⁽⁶³⁾一九一八年以前には六〇を数えた爐戸はわずか二〇に、一五万の鉱山労働者はわずか三万人に激減したのである。⁽⁶⁴⁾

(二) 龍雲政権下の箇舊錫業再編と錫業近代化

香港錫価格の暴落により多くの爐戸が没落しつつあるなか、精練の純度をあげることで国際競争力をつけ、経営を安定軌道に載せることに成功したのが、さきに触れた半官半民の「箇舊錫務公司」である。一九二六年、龍雲が雲南省政府の実権を掌握して以降、箇舊錫業において土法精練からの脱却が本格的に試みられた。龍雲は省政府内に新たに雲南省経済委員会を設立し、アメリカで冶金術を学んだ繆嘉銘をその主任に任命した。繆嘉銘は雲南省財政の立て直しに着手し、幣制改革と煉錫技術の向上に取り組むこととなる。

一九二四年、日本の外務省が行なった調査によれば、香港に移送された錫は広東商人の手を経て錫店に売却された。錫店はインドネシア産の錫を少量混ぜ、錫を再精練する。純度九九パーセント以上に達した上錫は外商に売却され、九八〇九パーセントの中錫、九七〇九八パーセントの下錫と錫カスが中国人商人の手にわたった。外商はニューヨーク・ロンドン・日本などに、中国商は上海・杭州方面に輸出した。錫店はこの再精練によって毎年数百万もの利益をあげていた、という。⁽⁶⁵⁾ 箇舊の錫の販路を国際市場に求めようとするならば、箇舊で精練を加えたうえにさらに香港で再精練を加える必要があったのである。

繆嘉銘は、精練技術の向上をはかるべく、一九二九年、龍雲に対し箇舊に錫務公司以外に官民合併で新たに“煉錫公司”を設立するよう提言した。従来、箇舊で産出する錫鉱石はマレー産に比べると鉄分や微量な鉛などの不純物を含んでいるうえに、精練工程の粗雑さから、その純度は九五パーセント〇九・六パーセントの間を上下していた。⁽⁶⁶⁾ 繆嘉銘は、シンガポールからアメリカ人技師アークティーコン Arch-Teacon を錫精練の顧問として招聘した。⁽⁶⁷⁾ アークティーコンは、反射炉を建造するなどして精練技術に改良を加え、純度九九・七パーセントにまで高めた錫を一日あたり、一五〇二〇トン生産しうる体制を作り上げた。かくして“煉錫公司”は、一九三一年より、広東商人を介在させることなく直接錫を外国に輸出することが可能となった。⁽⁶⁸⁾ さらに開速に精練用電力を供給するために二七〇〇馬力の発電能力を持つ水力発電所を建設し、さらに大屯湖に工場を設立し、鉱石をベルトコンベアーで工場内に搬入・洗浄する設備を整える計画が進められた。⁽⁶⁹⁾ こうした設備投資は、一九三〇年代の好調な錫輸出に支えられたものであった。

こうした技術革新によって、龍雲に代表される雲南省政府は多大の収益を獲得し、それを軍備の近代化に振り回けることができたのである。龍雲治下の雲南に武器を供給したのはフランスの龍東公司であった。龍雲はフランス

のサンシール陸軍士官学校に留学した息子の龍繩武をつうじ、国民党中央の手を経ることなしに、龍東公司から輕機関銃を始めとする新式武器を大量に購入した。龍雲は、一九三七年八月、南京を訪問し国民党政府の軍事會議において蒋介石の主宰する抗日戦への参加を表明する。その部隊も国民党政府第六〇軍に編成されることになるが、装備の面で国民党中央軍よりもむしろ威容を誇ったほどであったという。⁽¹⁰⁾

こうしたフランス式武装を支えたのが箇舊の錫輸出であったのである。龍東公司の支配人ロンドン Rondon, Jean-Louis は次のように一九三〇年代の雲南交易を総括している。

フランスは、雲南貿易を扱うフランス商人のおかげで、そして多少はインドシナも、中国の三省（雲南・四川・広西）との交易で独占的な位置を占めてきました。「中国の」輸出額（錫・猪絲）は輸入額（当初は武器）によって相殺されていました。フランスはこの交易によって大いに潤うことができました。フランによって平和な経済生活と戦争に必要な原材料を手に入れることができたからです。フランスフランは我々の工業生産物を中国に輸入することによって生れたものでした。……私は、一九三三年から一九三九年まで、雲南に二億一〇六六万余フラン分の武器を納入しました。……

私の会社では一九三六年から錫の交易を始めました。一九三六年から一九三九年まで、六五二四トン（二億五四八七万余フラン相当）の錫を輸出しました。この中には六三〇八トンの雲南産の錫と二一六トンの広西産が含まれています。⁽¹¹⁾

箇舊の錫は、財政を他省からの支援（協餉）に依存せざるをえない従来の財政構造から脱却させ、独自財源の創出、それによる武装化を可能としたのであった。しかし、自立の度を高めることは国民党中央と雲南地域軍との対立をより顕在化させることとなった。

さらに注目されるのは、一九三二年、ハイフォンに錫の精練工場を建て、アメリカ・ヨーロッパ向けに錫の輸出を手がけた「シュエラ兄弟商会 Maison Subira frères」のよう⁽⁷²⁾に、一九二〇年代に入り、龍東公司以外にも箇舊の錫業に参入を果たしたフランスの企業が登場したことである。土法精練の衰退、および技術近代化の流れは、皮肉なことに、箇舊錫商によって採掘・精練された錫板を広東商人のネットワークをつうじ香港に独占的に輸出し再精練を行なってきた従来の箇舊錫業にインドシナのフランス企業が参入していく道を開いたともいえるだろう。

おわりに

以上、長期にわたって存続した土法精練の構造とその変容に力点を置きつつ、一九世紀末から一九三〇年代に至る箇舊錫業の歴史を辿ってみた。改めてその展開を振り返るならば、中小硯戸・爐戸による民間経営を出発点として発展を遂げた箇舊錫業は一九世紀末以降、二つの外部勢力による再編の圧力に直面していたといえよう。一つは採掘権を確保し錫鉱石の入手および錫の精練に参画しようとする英仏産業界の圧力であり、もう一つは雲南鉱務督辦唐炯らが推進しようとした錫業に対する国家管理の強化である。半官半民の形態をとるものの実質的に官辦企業とみなしうる錫務公司はそうした系譜を引くといえる。

こうした試みにもかかわらず、箇舊の伝統錫業は持続的な発展を見せ、一九一〇年代には、錫業の黄金時代を現出させたのであった。錫業に支えられつつ、あたかも清末・民国期の中国各都市で見られたごとく、箇舊においては都市行政に商會が深く参与する自治の伝統が生み出されたのである。しかし、一九三〇年代に入り、龍雲政權のもとで錫務公司が実践した技術革新の試みは、より高純度の錫を求める世界の錫需要に即応し、多くの収益を雲南

政府にもたらした。それはまた、雲南とインドシナとが錫を媒介として、相互依存的な経済関係を成立させていく過程でもあったのである。

一九三〇年代以降、錫生産において、錫務公司に代表される新式工場の比重が高まりを見せたことは事実である。しかし、土法精練を淘汰しえたわけではなかったことに留意しておかねばならない。一九三八年においても生産額の四分の三はなお土法精練が占めていたのである。⁽⁷³⁾ こうした土法生産の持続力を支える簡舊の硐戸・爐戸の経営実態、さらに錫板の販出を担った広東商人のネットワークなどにより細密な検討が加えられるべきであろう。とりわけ、雲南と香港間の交易ルートを仲介したハイフォン在住華人の果たした役割が大きかったことが予想される。いづれ機会を改めて検証していくことにしたい。

凡例

略号には以下を用いる。

ADN: *Archive diplomatique de Nantes*

ACCIL: *Archive de Chambre de Commerce et d'Industrie de Lyon*

注

(1) 菅谷成子「島嶼部「華僑社会」の成立」(桜井由躬雄編『岩波講座東南アジア史四「東南アジア近世国家群の展開」』岩波書店、二〇〇一年、などを参照。

(2) 里井彦七郎『近代中国における民衆運動とその思想』東京大学出版会、一九七二年、第一章「資本主義萌芽問題研究」、李中清「明清時期中国西南の経済発展と人口増長」『清史論叢』五輯、一九八四年、など。中国の研究では、雲南大学歴史系・雲南省歴史研究所雲

南地方史研究室編『雲南冶金史』雲南人民出版社、一九八〇年、が最も包括的であり、箇舊錫業についても比較的多くの頁を割いている。

- (3) Brugière, Michel, 'Le chemin de fer du Yunnan: Paul Doumer et la politique d'intervention française en Chine (1889-1902)', *Revue d'histoire diplomatique*, 1963, pp. 23-61, 129-62, 252-78, Lee, Robert, *France and Exploitation of China 1885-1901: A Study in Economic Imperialism*, Oxford University Press, 1989, 権上康男『フランス帝國主義とアジア・インドシナ銀行史』東京大学出版会、一九八五年、篠永宣孝「雲南鉄道とフランス帝國主義—フランス外交文書に依拠して—」『土地制度史学』一三六号、一九九二年、など。

- (4) 道光『雲南通志稿』卷七三、食貨志八之一、礦廠一による。なお、方国瑜によれば、正徳『雲南志』卷四、臨安府土産、に「錫、蒙自県箇舊村出」とあり、箇舊錫業の歴史は正徳年間にまで遡らせうという（方国瑜「跋《箇舊公議廠規碑記》」『方国瑜文集・第四輯』雲南教育出版社、二〇〇一年、三三二頁）。しかし、通海県知県余慶長が箇舊を訪れ、『商賈輻輳、烟火繁稠』（余慶長「金廠行記」、方国瑜前掲論文より再引）と記すに至るのは乾隆二二（一七五七）年のことであり、箇舊錫鉱山の開発は一八世紀中葉に急速な発展を

遂げたと見て大過ないであろう。

- (5) 韋慶遠・魯素「有関清代前期鉅業政策の一場大論戦」（韋慶遠『档案論史文編』福建人民出版社、一九八四年）、一二二頁。

- (6) 中国人民大学清史研究所・档案系中国政治制度史教研室合編『清代的鉅業（下巻）』中華書局、一九八三年、六〇三頁。

- (7) 趙天寬の略伝については、丁文江「漫遊散記（九）雲南箇舊」『独立評論』二〇号、一九三三年、および失名「雲南大実業家趙老人伝」『雲南雜誌選輯』科学出版社、一九五八年（後、大安、一九六八年）、一七三―一七頁、を参照。礦山開発主たる廠主と鉅夫との間にこうした信頼関係が築かれる例は、一八―一九世紀の雲南鉅山業に少なくない。鉅脈発見までの間、衣食を含め生活全体を廠主に依存した礦徒たちは、廠主に対して全幅の信頼を置き、苛酷な採掘の作業に耐えるのである。こうして廠主への人格的帰依・信頼に立脚した強固な仲間的な結合が、廠主と礦徒間に築かれることになる。雲南・ビルマ国境地帯に盛況を呈した茂隆銀山は有名であるが、ビルマ軍やタイ族領主権力などが複雑に絡み合い、政治的に不安定な状況のなかで鉅山を開発しなければならなかったこの地域においては、礦徒集団はしばしば有力な軍事集団に転化した（『滇南碑伝集』呉尚賢伝）。呉尚賢と茂隆銀山の歴史

については、鈴木中正・萩原弘明「貴家宮裡雁と清緬戦争」『史録（鹿児島大）』一〇号、一九七七年を参照。

- (8) Brugnière, Michel, op. cit, n°1, p. 28
 - (9) 上文江前掲「漫遊散記（九）雲南雜書」
 - (10) Mesny, Williams, *Tungking*, 1884, p. 113. これは年間八万両程度の収益があったとされる。
 - (11) 唐炯『成山老人自撰年譜』広文書局、台北、一九七〇年、附録「己丑の条」。
 - (12) ロシエの伝記としては、ロシエの友人で第二次デモニエール遠征に参加したシモンの以下の記述を参考とした。Millot, Ernest, *Le Tonkin: son commerce et sa mise en exploitation*, Challamel et Cie, Éditeurs, Paris, 1888, pp. 66-7
 - (13) Dupuis, Jean (translated by Walter E. J. Tips), *A Journey to Yunnan and the Opening of the Red River to Trade*, White Lotus, Bangkok, 1998, pp. 66-8
 - (14) Brebion, A., *Dictionnaire bio-bibliographique générale, ancienne et moderne de l'Indochine française*, Paris, Société d'Éditions Géographiques, Maritimes et Coloniales, 1935, p. 144
- なお、デモニエールについては、坪井善明『近代ヴェトナム政治社会史』阮朝嗣德帝統治期のヴェトナム

一八四七〜一八八三』東京大学出版会、一九九二年、五三〜五七頁、を参照。

- (15) Nicolle, Dominique, *L'Épopée des douaniers en Indochine 1874-1954*, Kalash Editions, Paris, 1998, pp. 56-7
- (16) Rocher, Émile, *La province Chinoise du Yunnan*, Ernest Leroux, Paris, 1879-80. 本書は出版資金を援助したロビン・ハートに献じられた。
- (17) リモン商工会議所調査団派遣を強力に推進したベトナムに関する最新の研究としては、Klein, Jean-François, *Un Lyonnais en Extrême-Orient: Ulysse Pila, vice-roi de l'Indochine*, Éditions Lyonnaises d'Art et d'Histoire, Lyon, 1994, 44-46頁。
- (18) Mission à exploration commerciale en Chine: commission spéciale. Procès-Verbaux, le 27 mai 1895-28 août 1896 (Boite C2, S3-TC1), ACCIL
- (19) Lyon, Chambre de commerce de, *La mission lyonnaise d'exploration commerciale en Chine 1895-1897*, 1898
- (20) Emile Rocher à Monsieur le Président de la Chambre de Commerce de Lyon, le 9 septembre 1896 (Boite H4), ACCIL
- (21) Séance du 19 octobre 1897 (matin), réunions tenues par la mission de Chine à Lyon. Procès-

Verbaux (Boite C), ACCIL.

(22) Bruguière, Michel, op. cit. n°1, p. 55

(23) Dujardin-Beaumetz, *Rapport*, 1896, cité par Bruguière, op. cit., p. 56

(24) ルクレールの調査報告は、Leclère, A., 'Étude géologique et minière des provinces chinoises voisines du Tonkin', *Annales de mines* (sér. 9), Tome XIX, 1900, Tome XX, 1901, にちとめられているが、筆者未見。

(25) Lee, Robert, op. cit., p. 254

(26) 時あたかもインドシナ総督ホール・ドゥメールがハノイと雲南府(昆明)を結ぶ雲南鉄道敷設事業を推進するために雲南府を訪問した直後のことであった。鉱山労働者たちの行動の背景には、後述するように、ヨーロッパ式の採掘・精練法が導入されることへの危機感が存在した。Lee, Robert, *ibid.*, p. 206

(27) インドシナの軍人の中には、雲南を「中国の一部というよりは植民地」であるとみなし、雲南人・少数民族首長の支持を得ていない現政権に代ってインドシナ総督府が統治すべきだ、とする極端な主張が存在した。Lee, Robert, *ibid.*, p. 231

(28) Lee, Robert, *ibid.*, pp. 265-6

(29) 前掲『成山老人自訂年譜』附録「二一〜二二頁」。

(30) 王鉄崖編『中外旧約章彙編・第三冊』生活・読書・

新知三聯書店、一九五九年、五二〜五六頁

(31) 光緒二十九年五月初四日丁振鐸奏(中国第一歴史档案館・北京師範大学歴史系編『辛亥革命前十年間民衆档案史料』中華書局、一九八五年、六五五〜六頁)

(32) 光緒三〇年五月一六日丁振鐸奏(前掲『辛亥革命前十年間民衆档案史料』六七五頁)

(33) Collins, William F., *Mineral Enterprise in China*, Tientsin, 1922, p. 63-72 コリンズは隆興公司のイギリス側職員としてこの時期の鉱山問題にかかわっていた。

(34) 『鉱務档・第六冊』台湾中央研究院近代史研究所、一九六〇年、三二八頁。

(35) 『鉱務档・第六冊』台湾中央研究院近代史研究所、一九六〇年、三三〇四頁。

(36) 『保滇礦務研究總會事務所』は雲南府の建水会館に設置された(東亜同文会編『支那省別全誌・第三卷雲南省(附海防)』東亜同文会、一九一七年、八四八頁)。この運動に建水・臨安府の錫商人が多数関わっていたと見てよいであろう。

(37) Collins, op. cit., p. 70-71

(38) 前掲『鉱務档・第六冊』三三三〜三三三頁。

(39) 前掲『鉱務档・第六冊』三三三〜三七頁。

(40) 光緒二二(一八八七)年、岑毓英は総理衙門宛の書簡で、招商局設置の意義を説きつつ、

蒙自の錫廠は彼ら（＝フランス）の羨慕するところである。かつて法人涂普義^{デュピユイ}は提督馬如龍に軍装を運ばんとして越南より雲南にやってきた。錫を購入して出関し、大いに利益を得たことから、あれこれ画策し、この数年間にわたる（清仏）戦争を引き起こしたのだ。今、その謀を伐たんとすれば、必ず蒙自の錫鉱から始めねばならぬ（前掲『鉱務档・第六冊』三二八七頁）。

と述べ、箇舊の錫収益こそデュピユイがトンキンに介入し、清仏戦争を引き起こした原因であると指摘する。その後のフランス産業界の雲南鉱山開発論を見るべき慧眼といわざるをえない。岑毓英はこうした外圧に抗すべく、清朝が率先してその利益確保をめざすべきであるとし、そこに招商局設置の意義を求めた。実際、岑毓英は臨安知府らに箇舊の錫の調達を命じ、インドシナを経由することなく四川經由で錫を運搬・売却し、省財政を補填しようとした。しかし、官による錫業への投資と定額買付けは、箇舊の錫業関係者たちの強い不満を招いたようである。ブリュギエルは、一八八九年の蒙自領事の報告をもとに、一八八四年頃すでに採掘した鉱石に対する占有権など、臨安・石屏といった近隣の鍋頭との間に築いてきた諸慣行が官によって脅かされることへの危機感から箇舊の鉱山労働者たちの反官意識が高まりを見せていたこと指摘している

(Bruguère, op. cit., p. 29)。

- (41) 前掲『雲南冶金史』七九～八四頁、及び蘇汝工『雲南箇舊錫業調査』二五～六頁、『中国近代手工業史資料』一八四〇～一九四九・第二卷『中華書局、一九六二年、三九一頁より再引、を参照。
- (42) 丁文江『漫遊散記（一一）』『獨立評論』二三号、一九三二年
- (43) 篠永宣孝前掲論文
- (44) Le Consul de France à Mongtseu, S. Hayuy, à M. le Ministre plénipotentiaire de la République française en Chine Pékin, Mongtseu, le 5 mai 1917. Annexe. Note sur Kokieou. carton 207, 63/3, Pékin, ADN
- (45) ただし、本書には嘉慶初年の記事も含まれている。
- (46) A. Guérin, à Monsieur le Chargé d'affaires de France en Chine à Pékin, Yunnanfou, le 24 janvier 1921. Annexe. Au pays de l'étain. Rapport sur la région de Kokiou. Notes réunies par le docteur Jarland, carton 207, 63/3. Mines d'étain de Kokieou, Pékin, ADN
- (47) Rocher, Emile, op. cit., p. 232
- (48) 箇舊への運輸を独占していたのは箇舊に近接し、一九四九年当時、九〇〇余戸ほどの戸数を擁していた沙甸村の回族であった。箇舊錫鉱山の最盛期には、沙甸

村では各戸が二、三頭の馬と三頭程度の牛を所有し、荷車を仕立てては沙甸、箇舊間を往来した。こうして沙甸人は箇舊鉞山の住民の生活必需品の大部分を掌握していたのである。江応梁「滇南沙甸回族農村調査」『雲南回族社会歴史調査（一）』雲南人民出版社、一九八五年、九一—一〇頁。

- (49) 前掲『雲南冶金史』、四四頁
- (50) 『支那省別全誌・雲南省』第八編主要産業、第一章箇舊間における錫鉞、七〇〇頁。
- (51) 前掲『清代的鉞業（下巻）』六〇四頁。
- (52) 前掲『清代的鉞業（下巻）』六〇四頁
- (53) 台湾総督府官房調査課編（糟屋廉二執筆）『雲南省事情 其二』台湾総督府、一九二四年、七三頁。
- (54) Jarland, Au pays de l'étain. Rapport sur la région de Kokiu. op. cit., p. 16
- (55) M. Knight, Attaché Commercial pour l'Extrême-Orient, à Monsieur A. Boppe, Ministre de France en Chine, à Pékin, Shanghai, le 9 avril 1920, carton 207, 63/4, Pékin, ADN
- (56) 前掲『雲南冶金史』、一一〇頁
- (57) Rocher, Emile, op. cit., p. 238
- (58) 張星橋「修築箇舊鐵路簡史」『雲南文史資料選輯』第一六輯、一九八二年
- (59) 台湾総督府官房調査課編（糟谷廉二執筆）『雲南省

事情（其三）』台湾総督府、一九二四年、第二二章

- (60) Rocher, Emile, op. cit., p. 234
- (61) M. Knight, attaché commercial pour l'Extrême-Orient, à Monsieur A. Boppe, Ministre de France en Chine, Shanghai, le 9 avril 1920, ADN
- (62) 前掲『雲南省事情（其三）』第二二章
- (63) M. Knight, op. cit.
- (64) Jarland, op. cit.
- (65) 前掲『雲南省事情・其二』、一一七—一一八頁。
- (66) M. Knight, op. cit.
- (67) 志潜「曇花一現の雲南煉錫公司」『雲南文史資料選輯』第一八輯、一九八三年
- (68) 謝本書『龍震伝』四川民族出版社、一九八八年、一八六頁
- (69) 寛方「最近五年（一九三四年至一九三八年）雲南对外贸易新動向」『雲南檔案史料』第一期、一九八三年。
- (70) 林南園「民国初期至抗戰前後的雲南財政」『雲南文史資料選輯』第一八輯、一九八三年、七七頁
- (71) Jean-Louis Rondon à Andrée Guillard, New York, s. d., Aff. Etr., 1359, f. 18 cité par Valette, Jacques, *Indochine 1940 - 1945 : français contre japonais*, Sedes, Paris, 1993, p. 16
- (72) M. P. Crepin, Consul à Yunnanfou, à M. P. E. Naggiar, Ambassadeur à Changhai, Yunnanfou, le

27 juin 1938. Note : affaires d'étain au Yunnan.
Le commerce français menacé. carton 207, 63/3.
Pékin, ADN

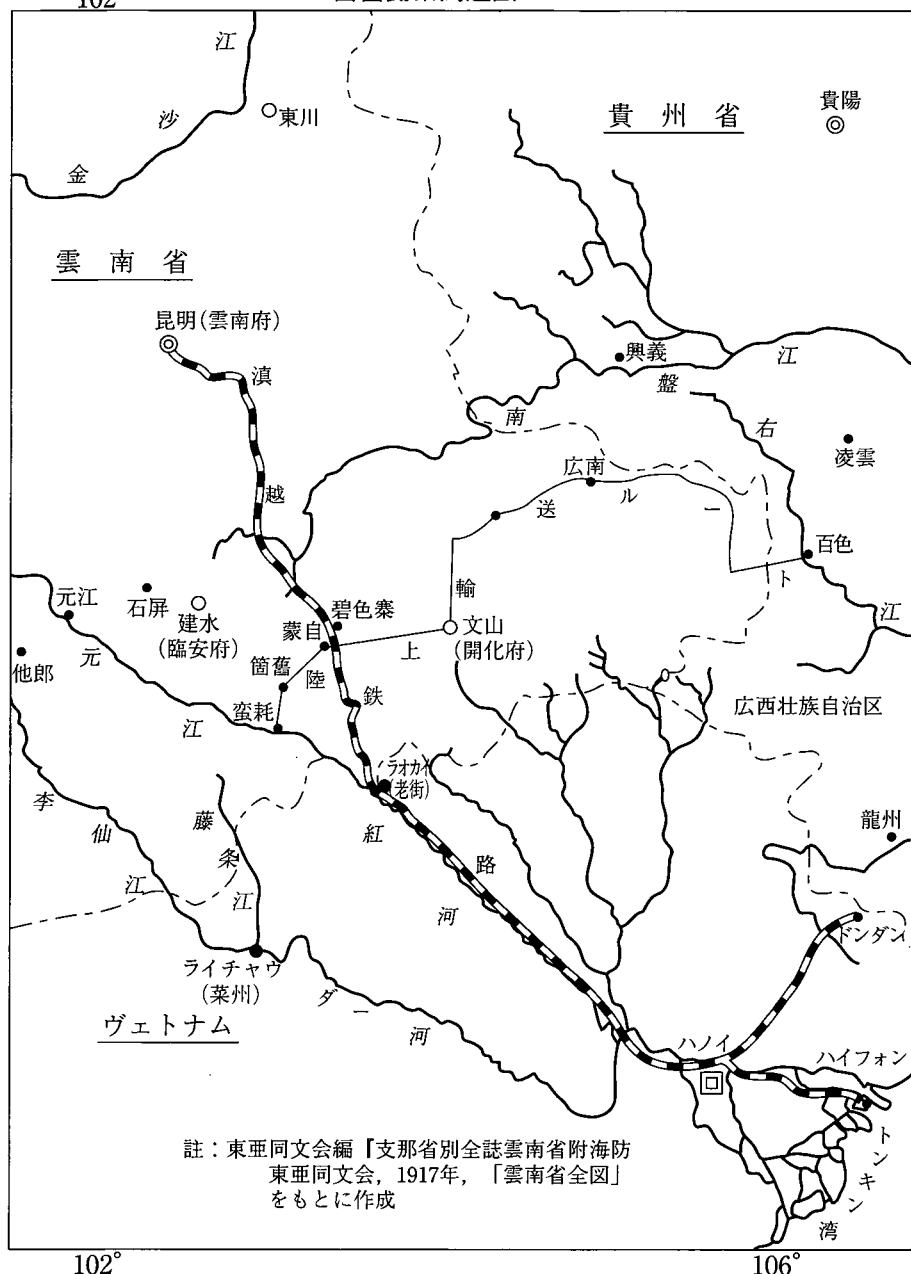
(73) 寛方前掲論文

ナ キー・ワード 箇舊、錫鉉業、隆興公司、香港、インドシ

102°

箇舊錫業関連図

27°



註：東亜同文会編「支那省別全誌雲南省附海防
東亜同文会，1917年，「雲南省全図」
をもとに作成

102°

106°

20°

'Tin Mining Industry in Yunnan in 19th and 20th century and French Indochina'

Fusaji TAKEUCHI

Key words: Gejiu, tin industry, Syndicat Minieur du Yunnan, Hongkong, Indochine

Tin mining industry in Yunnan Gejiu, located near Mengzi county and the Yuanjiang or Hong-Ha river, has its origin at the beginning of the 18th century and by the 1750s there emerged the guild of the local miners and the owners of tin forges. At the end of Qing period, the small entrepreneurs and the merchants of the guild outstanced the continous French mining interests' efforts to monopolize the Yunnan mining industry after colonization of Indochina. They strengthered strengthening the regulations which anned strictly the buying and shipping of tin ore without their accord, and realized the tin industry's l'age d'or in 1910s. The chamber of commerce and tin industry in Gejiu gradually acquired a wide range of quasi-governmental powers, sponsored public security forces, and provided an expanding range of services including the distribution of medical care, burial etc.